

はじめに

今回、詩を中心とした本を出版することになった。

当初、そういう予定でも企画でもなかった。

いろいろなことが二転三転し、

「詩を中心に書いたらいいんじゃないんですか」

と、編集さんからのひと言で、一度仕上がっていた原稿はなしにして、ゼロからまったく違う内容の本を仕上げることになった。

そこにたどりつくまでの話は、またいつかどこかで書くときもあるかもしれない。

詩の合間に、これまでの人生の紆余曲折から思ったことを書いたものを加えた。

こうやって自分の物語を書きあげてみると、人生そのものは物語なのだ、とあらためてそんなふうに思える。

ずっと昔から、それを詩と呼ぶなら詩というべく言葉の羅列を抱えながらもがいていた。抱えていたというより、それはどこから私のところへやってくるお知らせのようであり、文章というよりは、瞬間を感じた写真のようだった。その言葉を書き現してみるたび、そのように感じたから書いたというよりは、そういう文章が最初からあって、それを感じたといったほうが近い。

今回本に入れた詩も、すべてそうやって書いたものである。やってきた「瞬間」を、私は言葉として表記したにすぎない。

書きだすときは、電車に揺られながら数分で書くときもあれば、ふと浮かんできたので途中までメモしておいて、あとで最後まで書きあげる場合もある。

不思議と、そのときそのときの自分の状態にあった言葉が現れてくる。

そんなふうには詩を書きながら生きてきたが、毎日絶え間なく行っている呼吸をはじめ、生きることには一定のリズムがあるように思う。

きつと、誰にでも自分のリズムがあつて、そのリズムから大きくかけ離れてしまうと、人生がどこかギクシャクしてくるのではないだろうか。

私にとって詩や文章を書くことは、自分のリズムに合わせるためのチューニングの道具だったのかもしれない。

悩み、苦しいときにそれを乗り越えて先へと進むことは、理想かもしれないが、とても難しい。

それができずに悩んだ夜がどれほどあつただろう。

すべてでなかったことにして目を背けたまま生きられたらいいのかもしれないが、問題そのものに知らん顔をしつつづづけていると、その裏で自分を偽っているという後悔の

十字架をずっと背負いつづけることになる。それは、困難を乗り越えることよりも実は苦しい。

だから、なるべくなら苦しいときに苦しんで、それをどんなかたちであれ向かい合って（「逃げる」と決めることもありで）越えていくほうがいい。

それが近道だ。

近道を通るためには、自分のリズムを知って進む以外に方法がない。

この本に散りばめた言葉が、誰もが自分のリズムを思い出すきっかけのひとつになれば幸いである。